

# 『余地』

～相談業務を楽しむ方法 13～

## <一枚のハガキ>

杉江 太郎

### ～強いられる自立～

少し前の話になるが、関東の児童養護施設で、施設長が元入所児童に殺されるという事件が報道された。その施設長は、様々な形で社会的養護の子どもの自立を支援されてきた方だと聞く。その著書も拝読させていただいた。

社会的養護の自立のタイミングは、原則18歳である。入所延長をしたとしても20歳、その後、国が新設した事業を利用したとしても22歳という制限が設けられている。

社会的養護を利用するということは、家庭に何らかの事情があり、家庭では安心して生活できないと判断されている可能性が高い。そのため、退園後に家庭に戻るという選択肢はないこともあり、家族を頼らずに自立が強いられるという現実がある。

家族を頼れないということが、経済的な課題に直面化させてしまう。社会的養護からの大学進学率は、一般のそれと比べて極端に低い。学力の問題もあるかもしれないが、一番の理由は『お金』であろう。家族から経済的な援助を受けられ

ない、保証人が見つからないなど様々な要件がそうさせているのである。奨学金を利用して進学することも想定できるが、あくまでも借金である。その利用は計画的でなければいけない。

進学をしなかったとしても、社会的養護から自立したあとには様々な場面で困難を生む。冒頭に書いた、殺人を犯した入所児童も様々な困難を抱えており、元いた施設に相談をしていたとも聞いた。だからといって殺人が許されるわけではない。

社会的養護からの自立は、孤独・孤立との戦いである。今まで集団生活をしてきた児童が、年齢が到達し、児童ではなくなったという理由だけで自立を強いられ、一人暮らしをしなければならない。ある施設出身の方は、一人暮らしを始めたときに、家に帰ると静かで不安であると訴えた。施設には絶え間なく子どもや大人の誰かがいる。そのため、物音が聞こえなくなることはない。その環境に慣れてきたその方は、一人暮らしという静かな環境が不安を駆り立て、孤独を感じたのである。

今回は、『繋がる力』に焦点を当てていきたい。報道の件について、犯罪という形ではなく、適切な方法で繋がっておけたら良かったのにと心から思う。その施設で働いておられる方も無念でならないだろう。亡くなられた施設長のご冥福をお祈りします。

### ～対人援助職の魅力～

18歳を超え、施設を退所してしまうと、その児童と児童相談所の法的な関わりは終わってしまう。アフターケアという言葉はあるものの、実際の業務に組み込まれることはなく、個人として関わるということがほとんどである。

施設側はというと、アフターケアという形で、新しい生活が軌道に乗っているのか、困っていることはないのかなど後追いをすることはあると思うが、これも他の業務と並行して行われるものであり、相手に拒否されることがあると連絡が途絶えてしまうことも容易に想像がつく。

制度として整っておらず、予算も人もない状態である。そうなると、個人と個人の関係に委ねられることになるが、人事異動などがあると連絡が取れなくなる可能性出てくるし、プライベートの時間を割くことに対して、個人情報などの観点からも、批判が生まれる要因になりかねない。

公務員という立場上、業務上知り得た情報を・・・という言葉が頭をよぎる。

また、目の前の仕事で手がいっぱい……。当事者にこのことが伝わってしまうと余計に発信ができなくなるということになってしまう。施設で長く生活していた当事者こそが、その環境で働く職員の忙しさを誰よりも知っているのである。

とある研修で、講師の方が、子どもが施設から出るときに、自身の連絡先を子どもに伝え、困ったときは、いつでも電話をしてくるようにと伝えているという話を聞いた。実際に子どもから「困った」と相談があり、業務として離れたあとも「繋がっている」のである。

対人援助職は、人と人をつなげる仕事である。また人と人が繋がっていくことに魅力がある。年齢や制度だけを理由にして、今まで培ってきたものを、私は切ることはできなかった。その「繋がり」を維持しようと決断したときに、そのことがこの仕事を続けることの原動力として作用し始めた。今では、この繋がりを大切にしている。

### ～孤独にさせないためのお節介～

社会的養護からの自立は、『孤立・孤独』との戦いだと書いた。これは、あくまでも当事者ではない私が、外から見た想像である。実際に、そのように感じているかどうかはわからない。

実際に孤立している人間は、『孤立している』とは訴えにくい。しかし、いつでも、何かを発信できるだけの関係や糸口

は残しておきたい。そんなことを考えながら、自立のサポートをする中で、私が取り入れたのが「ハガキ」である。私は、担当している子どもに対して、年賀状や暑中見舞いを書くようにしている。

年賀状は日本の風習の 1 つである。1 年に 1 度、お世話になった方に、新年のご挨拶を兼ねて、ハガキを送る……。それが年賀状である。きっかけは、以前、出会った子どもが、年賀状にある「お年玉抽選」を知らないということに驚いたことである。確かに、携帯電話の普及により、年賀状を書くという習慣は廃れてきているのかも知れない。しかし、年賀状を書かないにしても、多くの人が知っているであろうことについては、大人になる前に、キチンと知っておいて欲しいと思った。「お年玉」抽選で、当たるわけがないのに、当たったかな？と新聞を見るという体験を知ってほしいと思った。

後、時期を同じくして、担当している子どもが郵便局で働くことになった。郵便局では、一時期問題になり、今は、どうかかわからないが、社員に対して、年賀状の「ノルマ」があるのである。少しでも協力をしようと思い、年賀状を買い始めたこともきっかけの一つである。

そんなことをきっかけに始めた年賀状であるが、自分自身にも大きな変化を起こすことになった。

以前のマガジンで、この世界は、「不連続の連続」であるとした。実際に、ルーティーンの業務があることはあるが、ほとんどが、突発的な事象による業務である。そうすると、自身の連続性を保つことが困難になってしまう。また、普段の業務に終わってしまい、発信のない子どもや、問題の起こさない子どもが取り残されてしまうことになる。問題を起こす子どもというのは、ある意味、発信する力を持っているとも言える。問題を起こし、大人が関わることで、孤独になることは回避されやすい。一方で、問題を起こさない子どもは、大人の介入が減ることにも繋がり、孤独になってしまう可能性を秘めている。

年賀状という、1 年に 1 度、連絡を取る術を確保することで、自分自身に起きている「多忙」を言い訳にせず、担当をしている子どもに思いをはせるきっかけになった。そうして、無事年賀状が届くことで、子どもがまずは変わらない場所で生きていることを教えてくれる。一枚のハガキかもしれないが、そのことで一方的に繋がっている。これは、自己満足であることも承知している。なんというお節介な援助者なのだろうか。しかし、私にとっては、継続してきたことの結果であり、成果であり、何物にも代えられない。そしてそのことは、対人援助を続ける原動力になっている。

～連続性を確保～

### ～主体的に関わる～

施設で生活をしている間は、職員も積極的に関わることが出来る。しかし、自立という名の元で退園をしてしまうと、その関係性は大きく変わってしまう。アフターケアという概念はあることにはある。そのことを体系化して実施可能な施設はどの程度あるのだろうか。仮にあったとしても、関係のある職員が退職をしてしまうと途端に破綻してしまう。

実際に数多くの施設を退園する多くの児童を見てきたが、やはり予後が良いと感じるのは、在園中に培われた大人との関係がそのまま維持されていることである。親を頼ることは出来なかったかもしれないが、施設職員を頼りながら、生活を維持している。そこには、主体的に関わる職員の姿が存在する。私が知っているだけでも、施設を退所した元児童と、その施設を退職した元職員が個人的に繋がっているという例が複数ある。お互いの責任と希望の範疇で、主体的に繋がることが可能であり、様々な制約からは解放されている。一度繋がったものは、簡単には放棄できないものであろう。

そのことと比べると、私自身の関わりは、お節介であることや自己満足である。しかし、何かの役に立つときが来るかもしれないと思い・・・というよりかは、自分がやりたくてしていることなので、このお節介はこれからも続けていこう。